

# 発掘だよりNo.40

平成 18 年 9 月 9 日 (土) 発行

豊川市教育委員会 生涯学習課発行

〒441-1292 豊川市一宮町豊 1 番地

TEL(0533)93-0153 (直)

しもろっこうじ

## 下六光寺遺跡平成 17・18 年度発掘調査の概要

市教育委員会では、豊川西部土地区画整理事業に伴い、平成 15 年度から下六光寺遺跡の発掘調査を実施しています。

下六光寺遺跡は、過去の調査 (03K、05A 地点) で弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴住居跡 43 棟や奈良時代の竪穴住居跡 1 棟、掘立柱建物 3 棟などが確認されています。

※ (参照：発掘だよりNo.37、平成 16 年 3 月 21 日発行)

今回の調査は平成 18 年 1 月から開始し、9 月末までの予定で行っています。

### 1. 平成 17・18 年度の調査概要

- ・ 調査期間 平成 18 年 1 月 11 日から 9 月末まで
- ・ 調査理由 豊川西部土地区画整理事業に伴う事前調査
- ・ 調査主体 豊川市教育委員会 (担当：生涯学習課文化財係)
- ・ 調査面積
 

05I 地点	1,470 m <sup>2</sup>	
06A 地点	777 m <sup>2</sup>	
06B 地点	761 m <sup>2</sup>	
06C 地点	216 m <sup>2</sup>	
06D 地点	87 m <sup>2</sup>	
		合計 3,311 m <sup>2</sup>

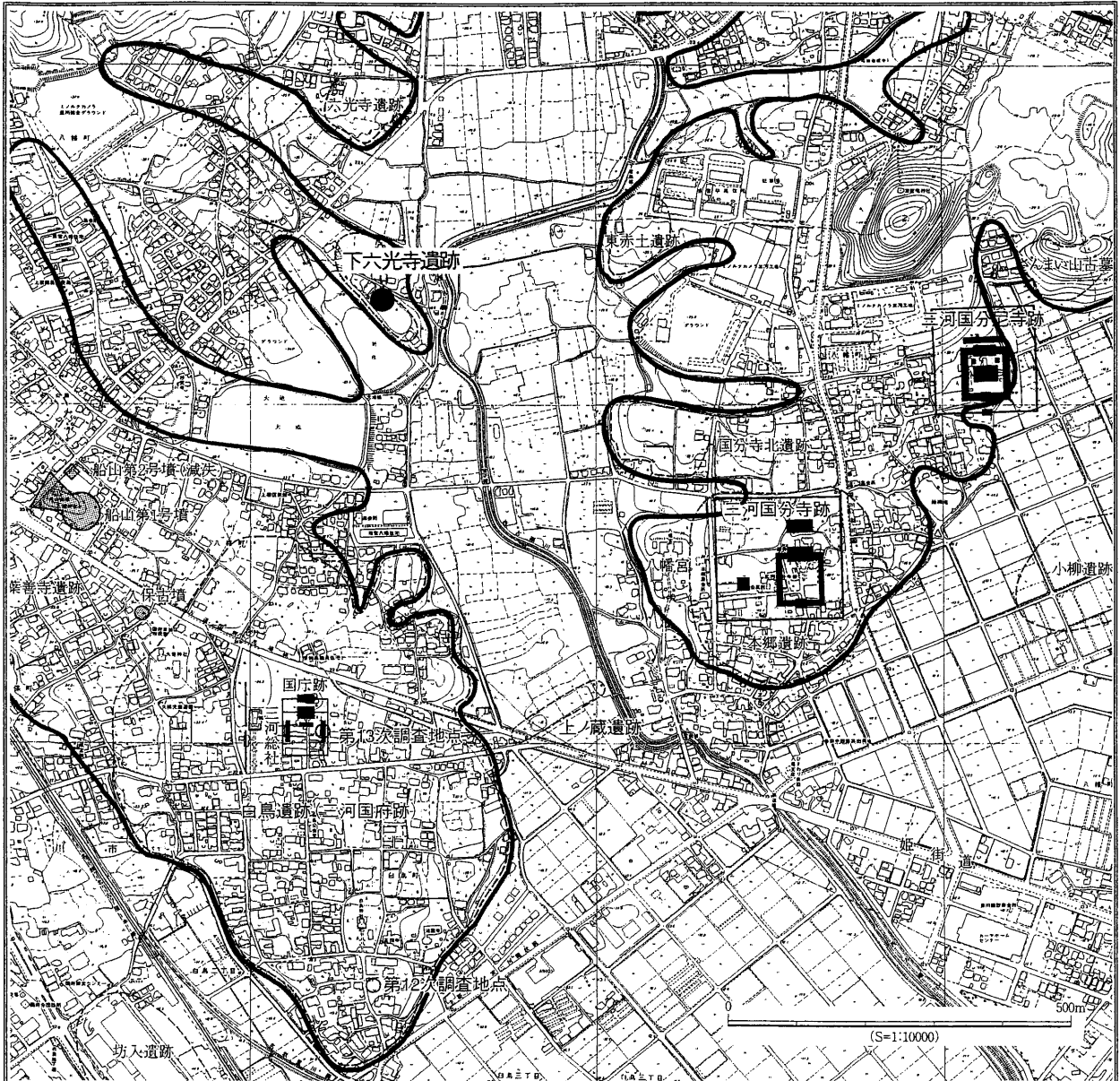
(平成 15 年度からの累計は 4,761 m<sup>2</sup>)

### 2. 確認された遺構・遺物

下六光寺遺跡では、長い間の人々の生活の痕跡が見つかっており、その時代は旧石器時代から中世にまでわたります。今回の調査では、それらさまざまな時代の遺構・遺物が確認されており、以下時代ごとにその概要を記します。

地点名	煙道付炉穴 縄文	落とし穴 縄文	竪穴住居 弥生・古墳	竪穴住居 奈良	竪穴住居 時期不明	掘立柱建物 奈良	土坑墓 平安
03K	—	—	23	1	9	3	—
05A	1	—	7	—	4	—	—
05I	—	—	7	1	—	3	—
06A	1	5	9	1	3	2	1
06B	—	—	—	—	—	—	—
06C	2	—	5	—	—	—	—
06D							
計	4	5	51	3	16	8	1

下六光寺遺跡地点別遺構検出数



下六光寺遺跡の周辺

### ・後期旧石器時代

この時代の遺構は確認されていませんが、弥生時代の竪穴住居跡や奈良時代・中世の遺構の埋土中、あるいは表土・包含層といった土の中から当時の石器類が出土しています。

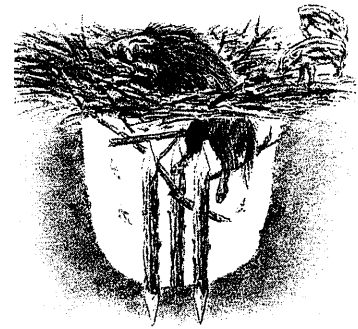
一口に後期旧石器時代といってもその営まれた時代は長く、本遺跡ではナイフ型石器文化の時代（今から2万年ほど前）から細石刃文化の時代（今から1万5千年ほど前）までの石器が出土しています。この時代は、現在の気候や地形とはかなり異なったものと考えられ、生活環境もかなり厳しかったものと推定されます。

なお、本遺跡周辺では平成6年度に行った天間遺跡の調査、平成7年度に行った駒場遺跡の調査、また、平成10年度以降行っている国分寺北遺跡、東赤土遺跡、白鳥遺跡などの調査でも当該期の石器類が出土しており、この豊川西部地区を流れる西古瀬川によって浸食されて残った舌状台地上には、この時期の遺跡が連綿と営まれていたものと推定され、この豊川市西部地区が旧石器時代の遺跡群として捉えることができそうです。

### ・縄文時代

今回の調査区内から3基の煙道付炉穴（焼成土坑）と5基の落とし穴状遺構が確認されています。煙道付炉穴は獲物を燻製にした遺構と考えられるもので、落とし穴状遺構はその獲物を得るために設けた罠（トラップ）と推定されているものです。

縄文時代の中でもいつ頃のものかは、出土遺物が少なく判然としませんが、近隣の調査例（旧浜北市中<sup>なかどおり</sup>通遺跡、小牧市浜<sup>はま</sup>井場遺跡、旧稲武町ヒロノ遺跡など）から推定すると、縄文時代早期の可能性が高いものと考えられます。



落とし穴状遺構復元イラスト

### ・弥生時代後期～古墳時代初頭

本遺跡が最も繁栄する時期であり、確認された遺構も竪穴住居跡を中心に多数検出されています。

確認された竪穴住居跡は、時期を推定したもの（時期不明）も含めて、今回の調査（05I地点以降）で24棟、過去の調査（03K・05A地点）で43棟、合計で67棟となります。

これだけの軒数をみると大きな集落のように考えがちですが、同時にこれだけの竪穴住居跡があった訳ではなく、建て替えを繰り返しながら、長い間にこれだけの棟数になったものと考えられます。おそらく同時に建っていたものは、10棟前後ではなかったかと思われます。

なお、この時期は邪馬台国<sup>やまたいこく</sup>と同時期であり、戦乱の世が終わりを告げ、大きなまとまりに全国が統一されていく時代と言えます。

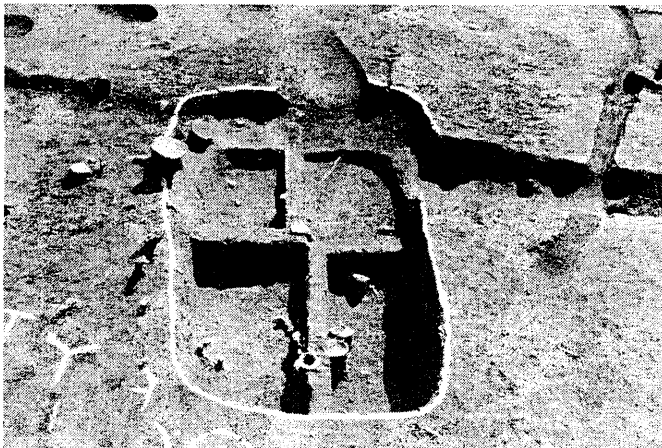
### ・奈良～平安時代（律令時代<sup>りつりょう</sup>）

この時代は、本遺跡の所在する豊川市西部地区に国府・国分寺・国分尼寺が置かれ、国際色豊かな天平文化<sup>てんびょう</sup>が花開き、名実ともに三河地方の政治・経済・文化の中心地となります。

本遺跡では、この時期の遺構として掘立柱建物跡8棟、竪穴住居跡3棟と土坑墓が確認されています。

確認された掘立柱建物跡8棟のうち、2棟は総柱建物であることから倉庫としての使用が考えられ、6棟の側柱建物や3棟の竪穴住居跡は住宅としての機能が推定されます。

なお、本遺跡は三河国府や三河国分二寺（僧寺・尼寺）にも近接していることから、これらに関連した施設であった可能性が高いものと考えられます。



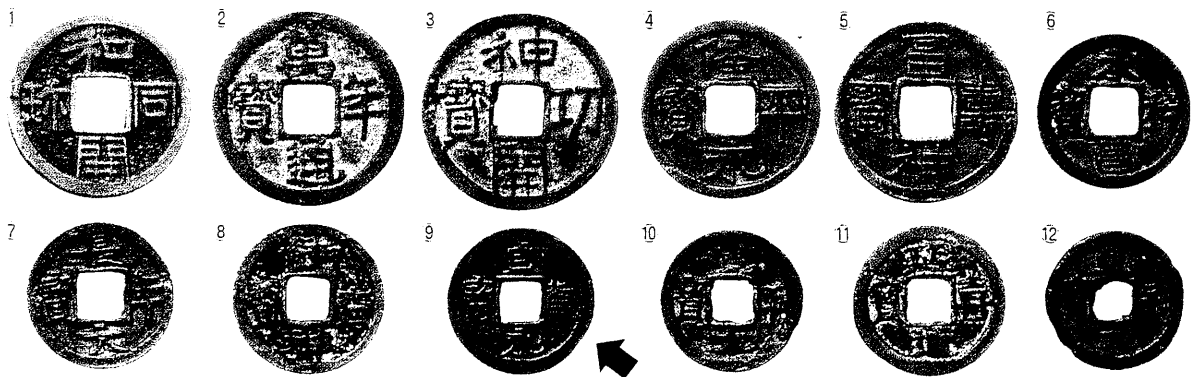
平安時代土坑墓 SZ703

この他には、平安時代中頃の土坑墓が1基確認されています。  
墓は長方形に掘った穴に木棺を埋葬する形式の土坑墓と呼ばれるものです。内部からは以下に示す品が副葬されていました。

- ・皇朝（本朝）十二銭の一つ「貞観永宝」2点
- ・灰釉陶器長頸壺1点
- ・灰釉陶器碗1点
- ・灰釉陶器皿4点
- ・鉄製品「紡錘車」1点

このうち注目されるのは、皇朝十二銭の一つである「貞観永宝」が2点出土していることです。皇朝十二銭で有名なのは「和同開珎」ですが、地方では、皇朝十二銭の出土例が少なく、「貞観永宝」は、愛知県内では初めてとなります。

皇朝十二銭は、中央ではある程度の流通が想定されていますが、地方では普遍的に流通していたものではなく、これらの銭貨を所有していた人物は、中央との結びつきが強かった階層であったと推定されます。



皇朝（本朝）十二銭（実物大）

	名称	天皇	鑄造年
藤原	和同開珎①	元明	708(和銅 1)年
奈良	万年通宝②	淳仁	760(天平宝字 4)年
	神功開宝③	称徳	765(天平神護 1)年
平	隆平永宝④	桓武	796(延暦 15)年
	富寿神宝⑤	嵯峨	818(弘仁 9)年
	承和昌宝⑥	仁明	835(承和 2)年
	長年大宝⑦	仁明	848(嘉祥 1)年
安	魄益神宝⑧	清和	859(貞観 1)年
	貞観永宝⑨	清和	870(貞観 12)年
	寛平大宝⑩	宇多	890(寛平 2)年
	延喜通宝⑪	醍醐	907(延喜 7)年
	乾元大宝⑫	村上海	958(天徳 2)年

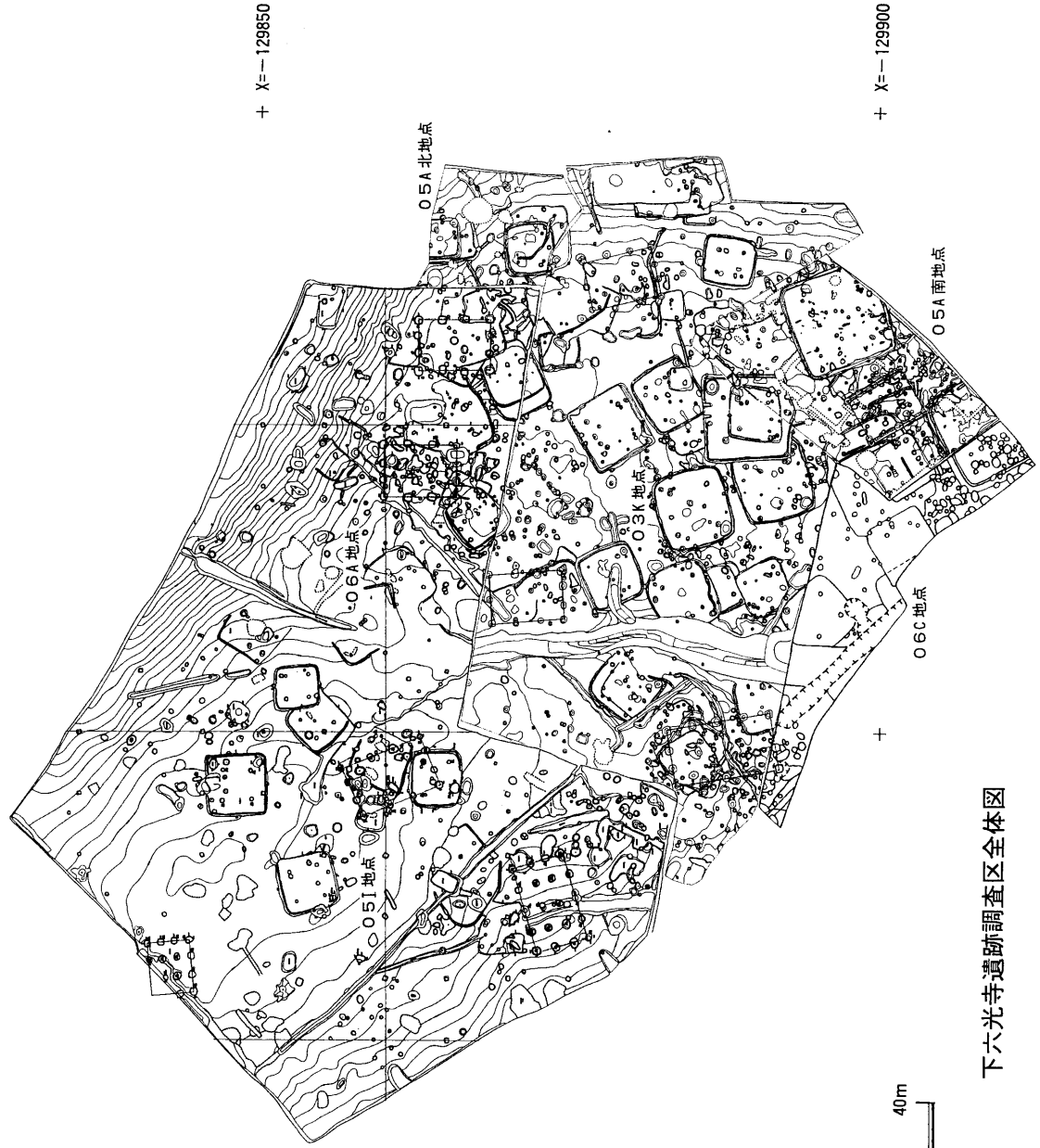
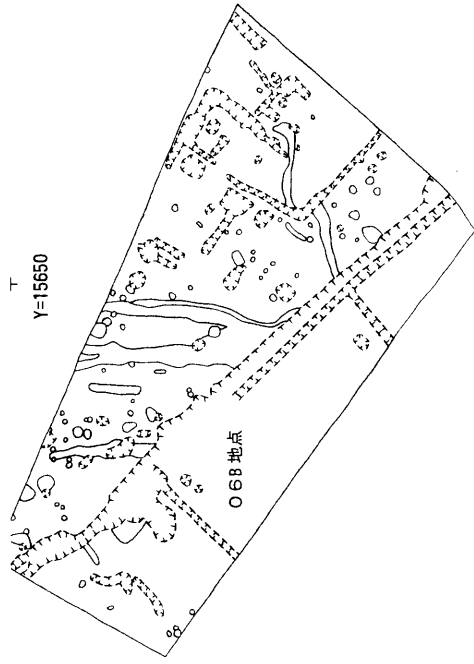
←今回出土した銭貨

皇朝（本朝）十二銭一覧

※この土坑墓から出土した副葬品は、三河国分尼寺跡史跡公園内にある「三河天平の里資料館」で展示をしています。ぜひ足を運んでご覧下さい。



下六光寺遺跡全体図

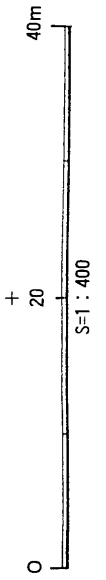


+ X=129850

+

+ X=129900

+



下六光寺遺跡調査区全体図